

第 42 回 系図の話

最近少なくとも自分自身の出自については出来るだけ正確に二人の子供たちに書き残しておきたいと考えるようになった。37 年前、誕生日と同じ日に亡くなった父も筆者と同じ年齢の頃、時々家系のことを話したのを記憶している。それぞれ 40 歳を過ぎている二人の息子たちは、当たり前のことだとは思いますが、家系図については全く関心がないようである。しかしながら将来年齢を重ねると何かの時には話題になるに違いない。

世間一般的にみて、その家の系譜には大概がかなり誇張して適当に作られてしまったため、精確さを欠くのが当たり前のうえ、首を傾げたくなるような怪しいものも多いようである。系図作りは下剋上がとくに激しくなった戦国時代のなかで城もち殿様になった武将たちの間で盛んに行われた。さらに戦乱の時代が終わって太平の世が続く血筋とともに特に家名が重視されるようになった江戸時代から明治にかけて多く作られた。

藩幕体制が確立され揺るぎないものとなって武家社会が確立された江戸時代においては、武士階級が中心となったのみならず農工商などの庶民の間でも世の中が平和になり職業が安定的に固定化されるに従い、その出自に関心をもたれるようになったのである。とくに武士階級においてはアイデンティティーを明確にすることは必要欠くべからざるものと考えられ、彼らはこぞって系図づくりに奮励したといっても過言ではない。幕府をはじめ系図の編纂に力を注ぐようになった諸藩大名も多い。

余談だが、今年の NHK 大河ドラマ「平清盛」の清盛は平安時代末期伊勢平氏の平忠盛の嫡男として 1118 年に生まれたが、生母については不明である。もと白河法皇に仕えてのちに忠盛の妻となった女房(高位の女官)の可能性が高いという説がある一方では、源平争乱のなかで平家一門の滅亡をえがいた「平家物語」(作者不明)では生母は祇園女御(白河法皇の寵妃)としている。ドラマでは生母や後者で、しかも清盛の目の前で亡くなっている。したがって清盛は忠盛のほかの子供たちとは血縁関係はないことになる。余談が長すぎた。

江戸時代からの系図については、実名をあげると現存の子孫の方々に迷惑が及ぶかもしれないので、本稿では筆者自身に関係したものを取り上げてみる。

筆者の蔵書のなかに「仙台叢書 伊達世臣家譜」がある。全 3 巻のこの書は昭和 50 年復刻版で限定 500 冊出版されたもので、解題(解説)平 重道、(復刻版発行者鈴木武夫、発行所宝文堂である。家系編纂事業は忠山公宗村(6 代藩主 1718 年-1756 年)徹山公重村(7 代藩主 1742 年-1796 年)の 2 代に亘り 20 年の歳月を要し、その結果まとめられた家譜が全 17 巻に著述された大著である。

伊達世臣家譜にはさらのその後 12 代藩主伊達斉邦時代の文政 6 年(1824 年)までの続編が書きつづられた。解説には「家譜は藩政時代には府庫に秘蔵された門外不出の書であったが、昭和 12 年から 13 年にかけて、当時の伊達伯爵家の特別の許可を受け、仙台叢書続刊として 6 冊にまとめて印刷発行された」とある。復刻版は続編前のものを全 3 巻にまとめたものである。

藤村家については、叢書第二巻の伊達家臣譜・卷之十三(上)・平士之部・三百石以下二百石以上(180 項)に家格平士石高二百石として記載してある。漢文体の記述は難解な箇所が多いが概略を記してみる。

「藤村の姓の源は、その先に藤村冶右衛門茂氏がいて、その祖は宇多源氏の佐佐木三郎盛綱である。茂氏の子紀茂が將軍家に仕え佐渡銀山の吏となって禄高二百石を拝領した。越後太守の反乱鎮圧に功があった佐佐木盛綱はその太守の土地(一部か)を賜り、盛綱の子孫がその土地のなかの藤村の壘(城の意か)の名前に因んで藤村氏を名乗ることになった。茂氏の次男惣兵衛茂傳が藤村の祖である。子孫は中間番士として知行石高二百石を保っていた。

茂傳の子茂春は佐渡の生まれである。浪散し(関ヶ原合戦で西軍に属したためか)、その後柴田越前守に仕えた。茂春は元禄元年(1688 年)日光廟改修のため来られた肯山公(四代伊達綱村)の目に止まり、柴田家の許しを受けて仙台に来た。元禄 12 年(1699 年)茂春は公務で出奔物誅罰のため大阪へ行く途中病気になり、大阪天満宮において 60 歳で客死した。綱村公はこれをきいてその妻子をなぐさめるように命じられた。

茂春の子茂利が宝永 2 年(1705 年)正月獅山公(五代伊達吉村)に初見えされ直所於今之間(原文のまま)を賜った。宝永 3 年 14 歳で兒小姓となり病気で一時免じられたが、病が癒えて小姓組に復帰した。その年の冬と翌年の春、藩主吉村公の母堂(孺人)である貞樹院様が病気になられたため仙台に随行した。茂利に子供が無かったため、茂庭利平次秀中第三男を養子として迎え後継ぎとした。それが藤村平治茂文である。宝暦元年(1751 年)12 月忠山公(6 代伊達宗村)の時、茂文は江戸番馬上に挙げられ、後に評定所

記録役人を経て町奉行に進んだ。茂文の子が貫治倫茂である。」と記載はここまでで終わっている。

その後については「私本 仙台藩士事典」(編著 坂田 啓.発行所 創栄出版.1995年2月.東京)によれば、倫茂は天明5年(1785年)6月江戸番馬上となったが、同7年9月故あって免職となり、半禄収禄(召し上げられ)閉門の刑を受けたが、閉門が解かれた後に国許に帰って城番となった。倫茂の子の茂栄が文化元年(1804年)12月父に代わって奉仕の際に、しっかりお勤めを果たすので禄高をもとの200石に戻してもらうように依頼し、官もこれを許した。文化5年(1808年)2月蝦夷蜂起を討つべく箱館に行き8月帰藩した。11月公式の食事とその際白銀三枚を賜った。文化6年3月禄高は元に戻り、9年4月江戸番馬上となった。茂栄の長男瀧松が早世したので第二男茂郷が跡継ぎに決まり文政5年(1822年)12月家を継いだ。

以上が記録に残されている藤村家の系図である。

ほかに明治25年(1892年)生まれの筆者の父が書き残した父から数代前からの系図がある。それによると藤村治兵衛茂春(文化元年(1804年)9月7日78歳で没)、松三郎(明治18年(1885年)74歳で没)、千代松(明治42年(1909年)2月73歳で没)、国松(明治31年(1898年)没)とある。国松は維新後江戸時代の武士の多くがそうであったように警察官となった。筆者の祖父に当たる国松は、妻子を日本に残したまま任地台湾に渡ったが、彼の地で没した。

父が書き残した江戸末期から明治時代の系図のうち、文化元年78歳で亡くなった茂春は享保時代(1711-1736年)の1726年生まれで、倫茂が閉門となった天明7年(1787年)には茂春は満59歳であったはずである。茂春は倫茂よりも前の時代の人物とすると平仄が合うが、養子となって藤村家を継いだ倫茂の父茂文と茂春との関係は文献や父の書き残しなどからは判らなかつた。今後知行石高も含め茂春やその子である最後の仙台藩士となる松三郎についても調べてみたい。

系図からうかがえるのは、とくに武家社会の江戸時代における家名を存続させることの重要性である。あとを継ぐ男子がないため他家の二男や三男を養子にして後継としたり、子ども

がない場合には血縁関係がなくとも夫婦養子をとって家名を継ぐことも当たり前のこととして行われていたのである。

現在は個人個人の遺伝子解析によってある程度のルーツが判明するので、系図のようなものは実際にはそれほど重要性はないであろう。一方日本人のなかで自分自身の歴史的な系譜上の帰属を知るということは意義のあることと思う。

(本稿における文献「私本 仙台藩士事典」は元仙台市博物館長東海林恒英氏によるものである。ここに厚く感謝申し上げます。)